基調講演Ⅱ

チョハン・ヘジョン（延世大学校文化人類学科教授）

【発表概要】

これまでの比較文化研究では、比較される二つの文化の間の差が強調されてきた。日本と韓国の場合、1960 年代、中根千枝氏のイエ分析を背景とした伝統的な組織原理の差異についての議論が活発であり、これは相続制度から政治文化と気質の差にいたるまで、その埋めることの出来ない距離が強調された。その上、韓日関係は、帝国主義の歴史により、いまだに被害者と加害者という構造に還元され、差異を強調する傾向が強く残っている。しかし実際、グローバル資本主義化が急激に進んでいるいま、巨大な組織の一部として転落した「社会」を分析する際に重要なことは、文化のあいだの差異よりも、共通の経験と困難さについての議論ではないだろうか？

私は最近、「近くて遠い隣人」と呼ばれている日本、そして日本社会についての議論が今までになく馴染み深いと感じている。貧しさから抜け出し、西欧コンプレックスから抜け出すために、国民の団結した努力の結果と経済の奇跡、ハードウェアと制度中心的な近代化、土建国家論、入試競争と企画された家族、極右派政治の登場、いじめとひきこもり現象からインターネットカフェ廃人（難民）と「イルベ（日刊ベスト貯蔵所）」（在特会+ オウム真理教）にいたるまで、ふたつの社会はさまざまな面でとても似かよってきている。

いま、グローバルな次元での変化の中で、「似てきていること」に注目し、共同研究をすることができないかと期待してみる。この講演は、そうした出会いのための道作りの作業である。